

# 今回の調査結果から分かること

無藤 隆（白梅学園大学教授）

本調査は保護者からの目を通してではあるのですが、幼児期から小学校への子どもの成長の変化を捉えようとするものです。同じ人たちを追いかけて調査するという手間の掛かる方法を採用したので、年齢に伴う変化をより確実に捉えることができます。今回は3歳児の段階から4歳児の段階へとどう成長を遂げるかを検討しました。その時期は保育所・幼稚園に既に入っている子どももいれば、ちょうど幼保に入っていく移行の時期に当たる子どももいるので、その成長ぶりをその視点からも見ることが出来ます。



この調査の狙いとして三つの軸から検討しています。それが同時に、私どもが進めている幼児教育（幼稚園と保育所の保育）と小学校教育をつなぐ基本的な柱となるという理論です。一つは生活習慣です。第二は「学びに向かう力」と呼んでいて、自己主張、自己抑制、協調性、集中力、持続力、好奇心といったことに関連するものです。3番目が小学校教育の教科の内容に関わり、特に文字や数や順序の理解などを取り上げました。

3歳から4歳に掛けて、学びに向かう力（特に自己抑制と協調性と頑張る力）が伸びるのですが、その要因を見てみると、3歳児期に生活習慣を身につけることが4歳児期の生活習慣をさらに伸ばすだけではなく、学びに向かう力と文字・数・思考の力を伸ばすという関係があるようです。さらに、3歳児期に子どもの意欲を尊重することや思考を促すという親の姿勢が4歳児期の学びに向かう力を育て、それがさらに文字・数・思考を育てるという関係がありそうです。

そこから、3・4歳という時期における基本的な生活習慣の自立が大切であることが確認されました。この年代では、どの家庭でも園でもそこに力を入れていると思います。生活習慣の自立はそれ自体、生活を自分で営めるようになるという意味で重要ですが、さらにそれがその後の考える力や学びに向かう力を伸ばすのだということに意味があります。まずは子どもの生活を大切にして、そこできちんと日々のことを営めるように子どもを育てることという基本が分かります。

親がこの時期に子どもの意欲を尊重し、子どもが自分の力で考えられるように促すことが大切であることも分かります。しかも、それはまずは学びに向かう力という学びの土台としての広い意味での力を促し、それを通して、小学校で学ぶ文字・数・思考の芽生えを育てることにつながります。直接にそういった小学校で学習することを教えるようなことが意味がないとはこの調査で出てくるわけではありませんが、少なくとももっと広い学びの基本部分を大切にすることが意味があることが言えます。

考えてみれば、広い意味での学びの力は生活に支えられ、また、学びの力が個別の学習内容の習得につながることは、この時期の発達の特徴を見れば、もっともなことです。改めて、いたずらな早期教育より、幼児教育の基本が肝心なのだと確認できたのです。

## 秋田 喜代美（東京大学大学院教授）

小学校での生活を考える時には、就学直前の5歳児の生活に目がむきがちである。しかし本結果は、3歳から4歳の時期において、学びに向かう力としての「自己抑制」や「協調性」「がんばる力」が、この1年間にかなり伸びていくことが示された。そしてこの4歳時期の3つの力、「生活習慣」、「学びに向かう力」、「文字・数・思考」の育ちに最も大きな影響を与えていたのは、3歳時期からの生活習慣であることも明らかになった。つまり、3歳で生活習慣が規則正しくできることが、4歳の生活習慣だけではなく、「学びに向かう力」や「文字・数・思考」の育ちの源にもなっているのである。



この結果は、3、4、5歳と、幼児期における着実な育ちがその後の人生の基礎を深く培うのに大事であることを実証的に示し、しかもその根幹になるのが生活習慣であり、発達における順序として生活習慣を整えることがそれ以外の力を育てていくという自立的生活者として子どもを育てることの大切さを示している。

そしてさらに子どもの3、4歳時期の育ちを支えるのに大切な保護者の態度や行動をみると、子どもの意欲を尊重するという子ども側の自発性、主体性重視の態度が学びに向かう力を育て、さらにそれが基本になって「文字・数・思考」を育てるという方向性がみられる。意欲を尊重する保護者の態度が、直接学力を育てるのではなく、子どもの意欲を大事にすることで子どもの学びに向かう力が伸び、その力の伸びによって結果として思考力や学力の基礎が育つというモデルが、本調査からは説明にもっともあてはまりのよいモデルとしてわかってきた。そしてそのかかわりの程度によってかなり子どもの育ちには違いがみられている。もちろん保護者が働きかければ子どもが育つという親から子への一方向の関係ではなく、子どもの育ちがあるので保護者もより働きかけるという子から親への方向性もあり双方向的な関係であることを考慮しなければならないのは言うまでもない。

親が文字や数が読めるように子どもに教えればその力は伸びる。しかし保護者の行動としては、「思考の促し」行動が多面的な育ちにおいて大事なことがわかる。「思考の促し」とは、具体的には、「子どもの質問に対して自分で考えられるように促している」「一つの遊びには多様な遊び方があることを気づかせるようにしている」「子どもと一緒に掛けた後お互いを感じたことなどを話し合っている」等の4項目である。親が直接子どもの問いへの答ややり方を教えるという指導行動ではなく、むしろ子どもの考えを引き出すようなかかわりをする、そのために対話するというように、聴いて受けいれ子ども自身に気づき考え語れる機会を与える受け止め上手な行動が、「思考の促し」である。3、4歳時期の保護者の行動が、「あきらめずに挑戦したり」「工夫して遊べる」ような21世紀に求められる学びに向かう力を育てていく。4歳時期ではこれらの項目は、高群の保護者でも「とても+まああてはまる」でも7割強である。5歳までにこれらの学びに向かう力はどのように伸びていくだろうか。来年度の調査結果がとも楽しみな、本年度の調査結果である。